

優先順位

今朝は、安息日を取り扱った癒やしの出来事をふたつ並べて取り上げます。地中海世界の人々をターゲットにしてみずからの福音書を記していったルカが、ある意味、もっともユダヤ的な安息日の問題をこのように重ねて取り上げるこの意味は何だったのでしょうか。そのことについて特に説得力のある意見は見つけられなかったのですが、安息日という非常にユダヤ的なものを題材にしながら、内容的には、イエスさまが安息日というユダヤ教の律法の中心にある戒めによって作り上げられたシステムを逸脱する癒やしの行為をなさった。それに対して会堂長、律法学者やファリサイ派といったシステムを管理する側の人間の態度は腰の曲がってしまった婦人に対しては安息日に癒やすのは良くない、また水腫を患っている人の場合は、安息日に癒やすことをどう思うかとイエスさまから問いかけられてもその場にいた律法学者もファリサイ派も黙ってしまっただけで答えなかったという。イエス・キリストにとっては憐れみがすべてに優先するということ。わたしが求めるのは憐れみであっていけにえではないということを行って学びなさい、と彼らに向かって語られたこともあったイエスさまの行動原理を浮かび上がらせ、それによって、わたしたち人間の側の規則を作って安心し、それを守ることが至上命題になって、「仏作って魂入れず」ではないですが、神さまが守ろうとされた人間がふるい落とされていく。そういうことがわたしたちにはあるのではないか。それを安息日というユダヤ人にとってもっとも大切な律法を取り上げて、ルカは明らかにしたかったのではないか。他山の石という諺がありますが、人のふり見て、わがふり直せという意味が、このふたつのエピソードにはあるのではないか。このイエスさまが安息日にふたりの人を癒やされた出来事に反対や沈黙をもって応えた彼らの反応のなかにある問題は、決して他人事ではないはず。そこでまず問題となっている安息日

がユダヤ教においてどのような意味をもっているかを明らかにします。そこを抑えないと、イエスさまのなさったことの衝撃が正しく理解できないからです。

モーセを通して、神さまから与えられた十戒の第4に「安息日を覚えて、これを聖別せよ。6日のあいだ働いて何であれあなたの仕事をし、7日目は主の安息日であるからいかなる仕事もしてはならない。～」とあります。これは出エジプト記20章と申命記5章の二箇所に記載されています。大切な点は、なぜ安息日に労働を禁じたのか、休みの日にするのかという理由づけが異なっている点です。出エジプト記の第4戒では、神さまが天地万物を創造されたのち7日目に休まれたため、これを記念するためとしています。神さまがお作りになった良いものが滅んでしまわないように、被造物の保全というのか、際限なく働いて滅んでしまうことのないようにされた。さいきんわたしたちはようやく「SDGs＝持続可能な開発目標」を掲げて世界的な取り組みとせねば環境問題をふくめて人類の存続に関わるという認識をもつにいたりましたが、それをはるかに先取りしていましたね。神さまはご自身が6日間かかって混沌から秩序ある世界を作りだされ、これをご覧になって良しとされ、そして7日目に休まれた。ここには休むことへの祝福があり、被造物への労りがあります。もともとファラオの奴隷としてこき使われていたイスラエルの民の嘆き、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの声を聞いてモーセを派遣するのです。またファラオとの交渉の際に休息を要求するのは荒野に行つて、主なる神を礼拝するためと言わせていますので、創造主に向き合い、礼拝することが人間のために必要不可欠であり、そうでなければ生きる意味が見失われ、追い使われて滅んでゆくわたしたちの世界の現実を見ておられたことがわかります。人は人を奴隷というシステムに組み込んで使う生きものなのです。このことが一層、はっきりしているのが申命記版の十戒で、この第4戒の安息日規定は「あなたがかつて奴隷であったが、主が

力強いみ腕を伸ばして救われたから」、いかなる仕事もせず、あなたの奴隷も家畜も休ませなければならないとされています。立場が変われば人間はすぐに誰かを奴隷にして使役するそのような存在であることが認識されています。このように人間が家畜のように扱われて滅んでゆくことがないように神は安息日を取り分けて労働を禁じられました。そしてこの日は礼拝の日となったのです。この安息日はお気づきになると思いますが、人間が本当に神さまを神さまとして生きているかどうかを確認するリトマス試験紙のような教えでした。あなたにはわたしをおいて他に神があってはならない、偶像を作るな、神の名をみだりに唱えるな、その次に、安息日を覚えて、これを聖別せよ、つまりこの日を労働をしない日として神さまに捧げることで彼らは自分たちが神の民であることを確認する機会としたのです。これを厳守したために、安息日に敵に攻められて武器を取らずに全員が討ち死にしたという衝撃的な事件もあり、自衛のために戦うことは神に許していただく、そうでなければ我々は全滅してしまうという一部例外も設けられたりもしますが、そのレベルで守られる戒めが安息日規定でした。わたし自身が体験したことを紹介しますと、ユダヤ教では土曜日が安息日ですから、金曜の午後1時位からお店などが閉店になります。2009年に聖地旅行に行かせて頂いた時も商店街が次々にシャッターをおろしていました。金曜の日没から土曜日になりますので、この数時間で土曜日に食べる料理の準備等をすべて終えなければなりません。食事を作ることも労働だからです。エルサレム市内の宿泊先のホテルには安息日専用のエレベーターがあり、要するに各階に停まるエレベーターです。9階とか、15階とか押さなくても良いように全部停まるのです。極端な気がしますが、一方で、こんなふうにするに出来上がっている秩序、システムによって守られて日常生活を送ることはストレスなく過ごす工夫でもある。イスラエルの場合、神さまから与えられた律法が生活の全領域をカバーしており、それを守るこ

とが神を愛することであり、神に仕えることであると理解されていた。そこに主イエスが来られ、語られたこと、なされたことは「システム」として律法を現実社会にさまざまに適用させていたユダヤ当局にとっては重大な挑戦と映りましたし、神を冒瀆するものとして激しい反発を引き起こすことになりました。しかし、そこにはイエスさまの憐れみの大きさがあります。失われた羊の声なき声を聴きつけて手を差し伸べられる良い羊飼いならではの振る舞いがある。このふたつの出来事はそういう出来事ですね。主イエスは目の前に失われたアブラハムの子がいたとき、一瞬の躊躇もなくその婦人を癒やしたのです。そこには周りの人の目を気にしたり、どう評価されるかという心配をしたりということがありません。イエスさまの癒やしの出来事全般に言えることですが、憐れに思ったそのときには相手に触れている。それがどのような状態の人間であろうとも、町で蔑まれている女であろうと、長く病気を患って人前に出ることを律法で禁じられている相手でも、一人息子を喪って嘆き悲しむやもめに同情して遺体をはこぶ担架にも手を伸ばして止めてしまわれるなど、この方のなかにある深い慈しみと憐れみは尽きることのない泉のように湧き出て悲しむ者、嘆く者、病んだ者、すなわちイスラエルの失われた者、神さまの前に立てなくなった者のまえに流れて行き、その人が本来いるべき場所、あるべき関係に修復される。つまりこの方には打算や、計算というものがない。救いとはそういうものだと思います。条件がない。このルカが記した安息日のふたつの癒やしの出来事はキリストとはどのような方であるかをはっきりと示しています。わたしたちの主は憐れみ深いのです。そして、また安息日という、本来は人を休ませる、素晴らしいものがどうして神さまがお与えになった恵みの枠組みから外れていったのか、それは何故かという問題を浮かび上がらせます。

この出来事を解く鍵のひとつは何が優先順位となっているかを考えることです。会堂長や律法学者・ファリサイ派の人々にとっては病人

は眼中にありません。彼らの最優先するのは個別の人の救いではなく、安息日というシステムが守られることです。長く病の霊に取り憑かれ腰を伸ばすことが出来なかった婦人をイエスさまは会堂でみかけられました。つまり礼拝の場です。イエスさまはその女を呼び寄せて「婦人よ、病気は治った」と宣言して、手を置かれたところ、腰がまっすぐに伸びた。この癒しの出来事を見て、安息日なのに何事かと会堂長が腹をたてて、「働くべき日は6日ある。その間に来て癒やしてもらいがよい。安息日はいけない」と群衆に言ったという。また安息日に水腫で苦しんでいる人をご覧になって、律法の専門家とファリサイ派の人々に「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」と尋ねましたが、彼らは黙っていました。互いの目が怖かったのかもしれませんが。イエス様を批判した会堂長も、無言をつらぬいた律法学者たちもファリサイ派も、彼らにとって安息日を守ることは自分たちの敬虔さをアピールするための手段であり、みなにそのように命じる権威をもっていることをアピールすることでもあったでしょう。病人の痛みや苦しみがなお一日引き伸ばされてもしかたないし、当然だと考えていた。しかし律法の本質は神への愛と隣人への愛に生きることでした。そのことは最も大切な教えは何かという議論で律法学者たちも認めているところです。しかし、彼らはそれが出来ない。安息日が彼らによって持ち出されるところにおいては、神さまが意図されていたこと、人間を追い使う者から解放し、くつろいで息をつけるようにする本来の、神さまが被造物に向けられる愛が感じ取れない。病人の存在は安息日ということで棚上げにされる。この日以外の6日間で、と言われる。しかし、この腰の曲がった婦人に次の日が来るかどうかを、わたしたちは保証することはできません。まさに今がその時なのです。イエスさまにとっては目の前で苦しむ人を救うことが目的ですが、会堂長やファリサイ派・律法学者にとっては安息日が聖別されるための手段として、目の前の病人が見過ごされる。憐れみを優先しないための

言い訳になってしまっている。このことがわたしたちの生きる社会の問題であることをルカははっきりと指し示しています。神さまに仕えるとはどういうことか、いつもわたしたちは状況に応じて新しく考え直すように求められている。わたしたちの先を歩いておられるキリストの憐れみの深さは、わたしたちの常識をも問うていることを覚えておくと思います。

お祈りいたします。